

回顧しているので論争をかもし出すかも知れない。兎角、此の二書を併読することに依って、国民党政府が関係公文書を公開する迄、はば確実な汪工作の全貌を掴むことが出来る。

評者はバンカー氏の研究途上にあつて多少助言を与えた為職業上の倫理として氏の研究書を本書と比較書評出来ないことを残念に思う。(China and Japan at War 1937-1945. The Politics of Collaboration. By John Hunter Boyle. Stanford, California: Stanford University Press, 1972. ix, 430 pp. Glossary, Bibliographical Note, Bibliography, Index, \$16.50.)

Z・アフマツ著

十七世紀における中国・チベット関係

山口 瑞鳳

一九五〇年、L. Petech 教授は *China and Tibet in the Early 18th Century* によって断代史の手法を世に示した。本書は、この書物が扱った時代の直前の一世紀を対象とした研究である。Petech 教授が半世紀の事件についてその論述を遍くしようとしたのに対し、本書はより長い一世紀の梗概を示そうとしている。率直にいつて、著者が標示した Sino-Tibetan Relations in the Seventeenth Century は、十七

批評と紹介 山口

世紀のチベット史のすべてをいう題であるとしても過言でないから、聊さか羊頭を掲げて狗肉を売るものを見る思いがしないでもない。

先ず、本書の内容を紹介しよう。第一章 (pp. 1-88) は典拠を扱い、(A)中国史料、(B)チベット史料、(C)その他となっている。掲げた史料はいずれも本書が一様に依用したののように見えるが、(A)については、(5)の清実録と一部で聖武記に拠るところがあるのみで、他は厳密な意味で用を為したものとはいえない。(B)では、吳三桂との交渉を扱ったところ迄、『ダライ・ラマ五世自伝』(第二巻まで)が割によく調べられているが、以後の部分は拾い読みをした程度のものであって、研究されたものとは云えない。一六四二年のダライ・ラマ政権樹立までを扱った部分でダライ・ラマ五世の『年代記』、*Sde srid Sans rgyas rgya mtsho* の『黄瑠璃』*Sum pa mshan po*、『青海記』(*mTsho shon lo rgyas*) その他が『ダライ・ラマ五世自伝』に併せ用いられているが、以後の部分では『ダライ・ラマ六世伝』の限られた拾い読みが僅かに含まれるに過ぎない。しかも、これらのチベット文献に対する解説は冗漫で要を得ていないばかりか、誤った紹介も行われており、著者が充分それらを読んではないことを示している。

例えば、『六世伝』について著者は自伝だとしているが、六

世伝中で *ned* 「私」と称しているのはすべし *Sans regyas regya msho* であって、*ダライ・ラマ* 六世ではない。また、その内容について、*f.156* までは十四歳迄のことについての記述とされている(*p.34*)が、六世の生誕後については *f.29b* から漸く筆が及んでくるので、それ迄は *f.25a* までは *ダライ・ラマ* 転生の必然性、*f.25b~27a* に五世略伝、*f.28a~35b* に六世転生の諸夢兆、予言を拾録、*f.36a~43b* に菩薩生誕の環境を説いて、*f.43b~45b* に六世生誕のそれに及び、その環境を詳説して、国、家系、時と並べ、特に六世の家系の *saMyos* 氏に多く (*f.54a~76b*) をあづけている。著者は何をもって六世自伝と判断したか不明であるが、*Sans regyas regya msho* の著作であることは *f.26b* のはじめに、五世が彼を摂政に任じたことについて「私に対して、土境の性なるも、金と見そなわしん、摂政をいとおめよとお命じたまひ (*kho bo cag la bon ba gser gzigs kyi srid skyon shabs phyi dgos pañi bkah phebs pa*)」と云うることと既に明瞭である。全文を読めば明らかのように、伝記の著者は、六世を呼ぶには『五世伝補篇』と同様、*mclog gi sprul sku* とか *sku shabs rin po che* の称を用いづる。*f.125b* の七月四日の条には、六世からの手紙について「私に下されたお手書きの御書簡の宛名に摂政サンゲギャツォに与うとあるものと (*ned du phyag bdar mahi bkah gog kha yig la sde pa Sans*

rgyas regya mshor sprod ces yod pa dan)」とあるのが反論の何よりの証拠として加わえられよう。

第二章は「場所と人々」(*p.57-63*) となっており、本書に示される件と関係のある土地や人々に関説したものらしいが、全篇を通じて問題になることをまとめてあるわけではなく、全体に不均衡で、徹底した記述になっていない。本文第三章以下と屢々重複しており、本文中で注とすべきものを特記したり、繰り返したりした感じである。

第三章以下が本書の主要部に当る。第三章「チベットの再生」(*pp.84-162*) は *ダライ・ラマ* 政権の成立をめぐる前後の事情を、第四章「順治」(*pp.163-193*) は清朝初期の *ダライ・ラマ* に対する態度を *ダライ・ラマ* 五世の清朝訪問の記述を通じて論じている。第五、六章 (*pp.194-229*) は、西寧事件、呉三桂の乱とチベットとの関わり方、三藩の乱に際して弱小チベットが大揺れに揺れたことの記述となっている。第七章から十一章 (*pp.230-329*) まではジュンガルの噶爾丹をめぐる清朝とチベットとの関係を扱っていることになっているが、この部分は殆んど実録の要約に終始して、清朝とジュンガルの関係を辿るだけで終っている。第十二章は「十八世紀への移行」(*pp.330-333*) と題するが、単に *Iha bzhān Khan* の登場にふれるに留まっている。

この書物は十七世紀のチベットと蒙古、清朝の関係をまと

め上げたという点では一応の成果があったものとされようが、掲げた標題を規準として批評すれば、いきおい苛酷にならざるを得ない。チベット文献の研究は後半に及ぶに従って粗雑になり、噶爾丹の所では稀に触れているといえるだけのものになっている。前半のダライラマ政権成立の前後については、始めだけに丹念にテキストに当たっているが、残念ながら著者のチベット語の読解能力が限られており、特に敬語法への理解が不十分なため、大切な箇所で主語を取り違えたりしている (pp. 139-140; p. 143)。全篇を通じて誤訳が多過ぎて、一々訂正しては紙幅が足りない程である。また、著者はチベット史一般についての常識に著しく欠けている。例えば dGah Idan pa にいうのは、ダライ・ラマ五世の『年代記』(「トッチナ教授」の TPS, pp. 648, 654) にもその訳文が拾載されているのをよく読んでおれば、sKyid cod sde pa が dGah Idan pa のことである (pp. 100-101) とわかる。Brag dkar ⑥ bDe chen rdzon ⑥ ヅウ (cf. hDzam glin rgyas byad p. 149, n. 324; p. 160, n. 418; mkhyen tse's guide, p. 105, n. 901; 五世『年代記』p. 104a, l. 6) も含めて奇妙な解釈 (pp. 104, 105, 107) は生れてゐる。また、ダライ・ラマ政権成立に最も深く関与した bSod namas rab brian や glin smad shabs drunh に関して触れるところが殆どないのは理解に苦しむところである。彼等の名は、『五世自

伝』の至るところで Gu gri khaṇ や Pan chen Chos kyi rgyal mtshan と共に言及されており、史料にこと欠かない。本書では、ダライ・ラマ五世の死 (pp. 41-53) が何故十数年間秘密にされた (p. 44) かというような主題をめぐっての議論の展開は全くない。噶爾丹についての研究が、事実上実録の要約を出ない場合、これもやむを得なかったわけである。以下に、上記の発言を裏づけるため本書の記述の具体的な検討を試みよう。

p. 43 に Sans rgyas rgya mtsho の任命を述べた文を引いて布令を宣布せしめたものとしているが、『五世自伝』の Vol. Kha, f. 255a-b (Gron smad A bar Sans rgyas rgya mtsho); f. 258a-b; Vol. Ga, f. 125a を読めばこのような誤読がなかったであろう。Sans rgyas rgya mtsho が五世の死を秘匿した理由を gNas chun の命令と伝記中に示すが、これをそのまま真にうけては研究が成り立たない (p. 45)。清に対する警戒と五世の死を秘密にすること、それに重要なことはすべて brag bsgril で決めたというのが五世の遺言だった (『六世伝』f. 27a) からである。秘密の公表も、六世の登位の日程もすべて brag bsgril (ツァンパの塊り中に答を書いた紙を円めこみ、二つ以上の答を用意し、碗に入れ、護法神の前で儀式と共に碗を振り、とび出たものを答とする) によって定めたので、曆によって決めたこと (p. 45) は

一度もない筈である。なお、*gsan bkrol/gsan brtol* (p. 52) は「秘密を釈く」の意である。*ダライ・ラー*五世の代りに香煙中で坐禅をして後姿を清の使節に見せた人物については『五世伝補篇』Vol. Na, f. 316a-b に説明がある。

(A) 東西蒙古の転宗(pp. 85-99)とは、新たに知られた事柄は何一つ示されていない。(B) チベットに於ける市民戦争(1603-21) (pp. 99-118) は、既に触れたようにチベット史の常識を充分にふまえずに述べられている。その前半部分(1605-06)は、『ダライ・ラー四世伝』pp. 41a-42a を見れば、正しい理解から遠いことがわかる。続く一六一八年以後の事件については、『アムド仏教史』pp. 36a-38b に要約が示されており、一六二二年前後の事情は、この線に副って『五世自伝』と『バンチェン・ラー一世自伝』pp. 65b-66b の記事を整理すべきである。一六三〇年代の事件では、Hor と Sog との区別が必要になってくる。著者は Hor を東方の蒙古、Sog を西方の蒙古と簡単に割りきって示している (pp. 105, 110, 112) が、『五世自伝』を充分読んだ結果とは思えない。五世は両方の蒙古はもとより、青海の蒙古もすべて Sog po と呼んでいる。トゥッチ教授が Sog po は外蒙古のことであると述べる (TPS, p. 256, n. 128) のも正確ではないが、Hor pa とする『五世自伝』p. 77b(a の誤り)と Hor A mdo ba (p. 55b とある) とあることから A mdo 方

面の部族と述べるのは従うべき意見と思われる。Hor のうさには Sog po 以外も含まれ、青海や mDo smad 方面にいる Sum pa 族も古くから Hor と呼ばれていた(『学者の宴』Vol. Ja, p. 18b, l. 7, Sum pañi khos dpon Hor Bya shu rin po, rñais po ti bse ru, p. 4b, l. 2, rñais 氏の祖)。この見地に立てば、『五世自伝』の pp. 55a-b; 56a, b; 66a, 68b; 72a, b; 73a; 77a; 81b; 83b や『バンチェン・ラー一世自伝』pp. 89b-90a の Hor と述べての記述が矛盾なく理解できるのである。なお、ホル・メバとカルカの事件について (p. 110) は拙稿「D・ミス『バンチェン・ラー一世自伝解説その他』」(東洋学報 53-3・4, p. 177a) に示したことがある。なお一六二六年のこととして著者が示した訳文 (pp. 109-110) は評者の理解と余りに隔りがあるので、次に相当部分 (p. 41a) について評者の訳文を示したい。

「私に蒙古へ来るようにと要請があったのに対し、先頃(青海の) iHa bsun 兄弟の招待 (p. 31a) の様子が憶い出され、憂うつになり、涙を少し落したところ、それを見て、蒙古の法師達が、『ソナム・ギャツォとアルタン汗会見の折を憶い出し落涙されたのだ』と語り、語り継がれた果に、彼等が蒙古に帰って、チャナル王リンダン汗に滅されるに及び、『(予め) このことを御存知で落涙されたのだ』とするまでの話になったという。この事情を中国に行った折、バンディタ・ルイダ

ンツェンから私は聞いたが、これこそ「分別」*Horas*を「悟り」*brags*の語で説明するたぐいの勝手な解釈であり、ラマ達の伝記の潤色にもってこいの話である。

次に一六四〇年のダライ・ラマとその周囲の事情を伝える箇所の訳文(pp. 125-126)についていうと、

「願実汗が内々の手紙をもたせてシディバートツルキヤを当方に遣した。管領ソナムラブテンは、汗の仰云ることはこういうことなのですと御説明になったが、私の方のなすべきことは自他平等の菩提心を保ち、きわだった徳によって争乱を延ばすことであり、それが出来ないからといって、そのようなごまかしをしたなら恥の上塗りにしかならない。ツァン王が当方に寄せた愛顧も、ゲルク派の寺院に供養し、好んで参詣もなされた程で、セラ、デブンに軍を投じた(一六一八年)のも、ラッサヤリゴにそれ相應の争乱が起きた仕返しとしてである。上下サキャ派、カルマ派、チョナン派三者は元来彼の根本師に当るのだから、これらとわれわれが寵を競うわけにはいかぬ。今、ゲルク派の教えの為とはいえ、また、ガンデンポタン(デブン寺當局)だけの力量からも許されるとはいえ、遣り過ぎれば、以前の口実のあった時と同様に今は出来ないから、このように今することは、内実のないに印を押すことになり、大罪となるなどと申し上げた。管領のいうには、仰云るとおりかもしれませんが、ゲルク派に対して彼等

のなすがままにさせておけば、大変なことになります。チョンゲ一族の例もあることですというのであった。これに対して、私から、ツァンパとチョンゲ一族のような場合ではチョンゲ一族のようにならぬようにすればよいので、ファンパに恨みをいづく訳はない。よしんば仇を討ったにしても、自分もはやチョンゲ一族に属しておらず、ダライ・ラマの席をけがす僧でありながら、売僧になろうとは思ひもよらぬことであるからどうかなさるべきことをなして下さいというやり取りがあったので、管領はそうしても結構ですと仰云って、私がルプクリンカに休みに出かける際に先方からの使者達を送り出した。その夜テントの中で、私のもとにあって管領は先方に使者に発つ筈のカチュ・ゲニェントウンドゥプに向い、願実汗に伝える趣旨として、かのビリ勢力の根絶は何としてもしないまえ、その後は汗自身ツォカにお帰り下され、二王妃をはじめ善根を積む人々をチベットにお送り下さい、争乱は時宜にかなひませんとなど普く指示なさった。翌日、カチュ・ゲニェントウンドゥプに必要なものを手渡すためと称し、管領はガンデン・カンサルに赴き、チャブテンカで二刻もの間彼と相談しておられたと聞いたが、まさかこの間に白が黒に変わっていたとは思ひもしなかった。

とあるのを引用して、誤ってダライ・ラマ五世の野心の程を説明しようとしている(pp. 126-127)。この部分の拡大した

訳が *Shakapa* の *Political history of Tibet*, p.106 にもあるが、本書の著者の考は全く見当違いで、実際は上記のように逆の話が『五世自伝』中に語られているのである。

著者の *mTsho ston lo rgyus* の訳 (p.128) は、楊和増氏のより正確な訳 (*The Annals of Kikonor*) (p.38) とその註 105 (p.74) に従うべきである。

管領ソナムラプテンと共にダライ・ラマ政權の確立に関与した *glin smad shabs drun dKon mchog chos bphel* の面目を示す一文も、著者は、ソナムラプテンの場合と同じようにダライ・ラマ五世自身の悪しき野心を示すものと誤解している (p.140)。この文は次のように訳すべきである。

「リンメ・シャブドゥンがサンパから来られ、セラの客殿の屋上で御散歩の折、御覧になったニンマの予言書のようなものにこうあったというのが本当かどうかはともかくとして、マルポリとチャクポリ両方を接合する一大要塞を構築して、セラ、デプンと対にすれば、今後とも安泰至極となり、(マルポリが) 観音の聖地であるから、マニの道場を設けたら、寺方檀那共々の罪障が拭われてよいことであろうとなど仰云ったのに対し、私が、蒙古の兵がいる限り心配ありますまい、それとも、要塞にたよるおつもりではまさかありますまいと申し上げると、シャブドゥンが答えて、仰言るようならば、近頃大争乱が起ったのはどういふわけでしょう。お心を明ら

かに御判断下さい。以前も争乱とのかかわりを避け、一度起れば、けりがつくまで北に逃れるばかりだったので、教の為にはなりませんでした。今、こうしたことをしなければならなくなっているのにそうせず、シャンカバの教をしかくなおざりにするなどまさかとは思いますが……三つを兼ね合せて出兵し、槍に血を吸わせず帰るなどあってはなりませんと今後将来にかけての御注意を色々と賜った。(pp.118a-b) 著者の解説 (p.143) は肝心な点が裏返しになっているのである。著者は一六四二年前後のダライ・ラマ五世の年齢を考慮したことがあるのだろうか。この時代を動かししたのはダライ・ラマ五世ではなく、*bsod nams rab brtan* と *glin smad shabs drun* の *dGah Idan pa* 一党、それに彼等を牽制した側の *Pañ chen Chos kyi rgyal mtshan* と *dGah Idan* 等の座主達、更には、彼等の夫々と結んだ蒙古人 (*Ha bsum blo bzau bstan bdzin rgya msho*, *Gu ru hun thabji ji bsTan skyon rgya msho* から *Gu gri han* に至る) であり、彼等との関係の発展が研究の中核とならねば体裁を成さぬのではないだろうか。

西寧事件についての一文 (p.136) は次のような訳になると思われる。

「中国と蒙古の間に生じた不都合に対して青海の酋長達は清帝の寛恕を求めて馬や財宝をはじめとする財物を大量に献

じたが、(今後は) 国境も夫々まぎれることのないように区分し、盗賊の類の難が起らぬように相互にきびしく規制し合ひ、交易を拘束しないなど、中国と蒙古のよい関係を樹立して下さるようと色々申し上げるべく(使者達)を(清に)送った。この件に関して、摂政と王とが相談し、ダライ・フンタイジも責任を感じて動いたので、青海の酋長達が家運を傾けるような貢物の提供にも文句をつけなかった。そのためさしもの騒動も静まったので……

従って、著者による一九六頁冒頭の説明は前頁の末尾も含めて誤りである。この事件については『五世自伝』Vol. Kha, 30a にも説明がある。

呉三桂の乱に際してチベットの基本的立場を明かにした文(pp. 206-207) の訳文 (pp. 207-208) も評者の訳では次のようになる。

一般に生きとし生けるものは、区別なく恩義ある父母と同じであるべきだが、一方に偏する悪癖はぬきがたく、自他の宗派を等しくみそなわしたアティーシャにまねくことはとても望みがたい。従って、可愛がってくれるものは父母と同じとのたとえのごとく、清国とは、ヌルハチ王の時に贈物と共に使者を送ってよしみを通じてきたので馴染みそめ、やがて順治帝が中国の帝位につき、以来今日に至るまで御心をもち、我等をよく遇して限りなかったので(親近の思いは格別にな

っていた)。殊に私が自ら宮廷に至った際、竜顔を拝し、贈位にあらうなどのことから清朝の御陵威の堅さを(知ったが)、実に、中国全土に善政を施してこのような実を挙げることは他の誰にも出来ることでない。チベット全土の兵を挙げていっても、中国・蒙古の広大な国土で出来ることは知れている。蒙古オイラートの軍をひきいて至れば、戦力はあろうが、これとて当方の思うにまかせず、さらに物資の欠如、天然痘の心配をしなくてはならない。だから、皇帝のためにこれのことをするとお約束することは叶わぬけれど、一応寺方と施主とが相はかつて、高位の人々の大事を慮り、急いでダライ・フンタイジも出発させる計画となった。ゲルトン方面で皇化に服さぬものを達を背後であやつる元凶はジャンなどの誰であるか計り難いけれども、当方の計画と一般的な目的のため廿日に……派遣した。

この部分では tGyal than とカルマバとの関係の追求がないため問題が上すべりで終わっている。ちなみに帕克木は Shva dmar の dPal ngon の対音である。

アラ山厄魯特の研究の部分で特に目立つ欠点は人物の認定の仕方である。聖武記卷三賀蘭山厄魯特と皇朝藩部要略九 (11b-12a) を読めば、ここに登場する厄魯特済農も、巴圖爾済農も和囉哩のことであることが極めて明らかで、同じ手順をとれば、他の人物についての確認も簡単に済んだと思われる。

著者が『ダライ・ラマ五世伝補篇』中に關係箇所(といへても使節の出入りについてののみ)の点検を行っているが、殆んど拾い読みをしたものであるため肝心な見るべき所を屢々落している。次にそれらの見るべき箇所を補っておきたい。

p. 246. 一六五八年十月三日の条に清使到着の記事はない。Gro mdah mkhan po の献上記事のみある。清使 Phun tshogs bla ma, Ye ges dge ston は九月十七日到著²⁶⁹ (p. 122b)。十一月二十三日帰途に²⁷⁰ (Vol. Ca p. 142a. 4) ャハ使 Chab nag mkhan po 2 Thar rgyas pa を同行²⁷¹。

p. 247. 垂木珠爾拉木托木巴とは rab bhyams pa Chos bhyor のこと。一行の到着は Vol. Ca p. 152b 2 一六八六年二月十七日付に示される。

p. 248. マサ到着に²⁷²は前項参照。Gro mdah mkhan po は既に帰²⁷³は(前々項参照)。

p. 246. A chir thu dge ston 2 bStan pa gsal byed は一六八四年五月十日にマサに²⁷⁴ (Vol. Ca p. 50a)。

同(十二日更に二人の清使が至²⁷⁵ (ibid. p. 52a)° A chir thu dge ston 2 カルカとオヤラートの和解促進の使参巴降布 Lo Sems dpah chen po は共に六月二十一日に出発 (ibid. p. 57a)°。

p. 268, n. 47 2 Vol. Ca p. 217a を示すが、到着日は

ibid. p. 215b に見えている。それによれば、四月十九日のこととなり、三月九日に北京を出発した使節とは益々云いにくくなる。使節の名は Don grub dkañ bu 2 Grags pa dge ston 2、一六八五年十一月に清使と同行した Chab nag bla ma も同じ頃帰²⁷⁶ (ibid. 216b)°。なお、七月十九日に帰国する清使 (p. 269) に²⁷⁷したチベット使の一人 Co ne dbon po 2、時 2 dGah lhan khri pa の甥の意味 (ibid. p. 254b, l. 6) 2、著者のような無責任な訳語は控えた方が²⁷⁸。

p. 270. 商那多爾濟等の到着と出発は夫々 Vol. Ca pp. 233b, 238b に示されて²⁷⁹。

p. 277. Vol. Ca pp. 262a-b. の見落²⁸⁰。ibid. p. 277a の重大な rTa tshag rje drun rin po che の出向依頼の項を見落²⁸¹。済隆は²⁸²は sKyid groñ 2 關係なく²⁸³ rje drun の対音²⁸⁴。rTa tshag rje drun 2 ²⁸⁵は『六世伝』 pp. 151b-152a, 167a, 168a を参照して貰う²⁸⁶。

Vol. Cha 2 ²⁸⁷の關係箇所の指摘は割愛して²⁸⁸ pp. 310-311 2 対する評者の訳文を示して置きた²⁸⁹。

ツキナ・ケツンに関しては、六月二十七日に(北京に)ついた後お叱りにあった様子など次々と判明した。他方皇帝が寧夏までお出ましになり、必要とあらば印度までもお出でになろうとの御威嚇……のあった様子を知った。…… (p. 151

じ……禪定が終りきらない時、中国の使節……保住 Jarjuct の三人が直接宮殿に至り、その日のうちに敕書を手渡したいと急がせたが、チカン・クンチョの適切な応待で禪定が終るまで待たせた。内禪定が終った十四日の当日も敕書を持って宮殿に至り、せきたて、(私ハサンゲギャツォが) 会いに出ないなら食物など要らぬと皿を投げ、彼等が誓いを立てる時こうするのだと云って力を抜いて見せるなど大変な荒れ方であった。外禪定期が終っていなかったが、余りにせきこんだ振舞いが数々あったので、十五日カムスムの部屋で……など蒙古の使もまじえて彼等と会見した。席上、敕書と布六反の副え物をよこし、六か所の蒙古に配った敕書の一つでアヌの許にあったというものを見せ、ゴカル地方の刀を噶爾丹王のものだと示し、噶爾丹と私を同一視したお叱りの敕書と、同様の敕書を沢山伝えた。結局いうところは、五世が先ず在世するかどうかをこのラマに調べさせること、パンチュンを招きに応じて送り出すこと、(タツァク) 濟隆活仏と (Isib/Isa) ポシヨクトジノンのもとにいる噶爾丹の女をとらえて北京に送り届けること、これが出来なければ、皇帝が軍をひきいて来るか、軍をさしむけると仰云るのであった。保住も、強力な大軍をととのえていることや、プータンが清帝に誼みを通じている旨をつけ加わえた。ジンパギャツォとディムチの二人は五世に献上する敕書をもって会見を待つて留り、保住に

批評と紹介

第八
辻

は、きつい言葉を賜ったことに對する当方の申し開きの御説明をするためと戦捷の祝いのカタ、仏像、旗、奏上文を副え物ともどもさし出すためにツォナケツウンを伴わせて、送り出した。

以上で著者の訳文を点検する一つの手がかりを示し得たと思う。畢竟するに、著者は功を急いで、成るべきものを成さずに示したとしか評者には云えない。明らかに有能な著者のために惜んで余りあるが、今はただ、後日の大成に期待したい。

Zahrudin Ahmad: Sino-Tibetan Relations in the

Seventeenth Century, Roma, 1970

(IsMEO, S.O.R. XL).

ヴァイディカ・サンショータナ・マンガラ出版

タイッティリーヤ・サンヒター(第二冊)

辻 直四郎

プナーの上記出版所は、パッタ・バースカラならびにサーヤナの注釈を伴うタイッティリーヤ・サンヒター(『S』)の大出版の第二冊を公刊し、堅実な進捗を世に示した。その内容・体裁、学術的水準・特徴、鮮明な印刷等は、既刊第一冊の場合に等しく、本誌第五十四巻(一九七一年)、二五九—二

第五十五巻 五二三